諏訪小だより

令和５年７月２１日
７月特別号
多摩市立諏訪小学校
校長　齋藤　幸之介

御礼

－３か月半の御報告を兼ねて－

４月６日から始まりました令和５年度も、本日で一度区切りをつけ、明日より４０余日間の夏休みを迎えることとなりました。ここに至るまで、皆様には多方面に亘る御理解と御協力を賜り、深く感謝を申し上げます。

３年以上苦労をしてまいりました新型コロナウイルス感染症への対応も、５月８日をもって変更されました。学校での子供たちの生活ぶりも徐々に変化をしてきました。一方で、この機に得た経験と教訓を踏まえ、続けていくべきことは何か、と自問自答してまいりました。

また、よく「取り戻す」という表現が用いられますが、教育活動を単に元通りにするのではなく、よいものは残す、改善すべきことは改善する、とさらなる向上を図ってまいりました。

「取り戻す」ことと「改善する」こと

４月２２日（土）には、保護者及び御家族の皆様の多大なる御協力を賜って総合防災訓練が行われました。こと私にとっては、これだけ多くの、そして確実な引取ができたのは初めてでした。「お力添えをいただけている」と心がふるえました。

この訓練を皮切りに、様々な学習活動が行われました。天候が芳しくなかった消防写生会（１・２年生）は、多摩消防署の方々の御尽力もあり、全員が消防車への理解を深めながら立派な絵に表現をしました。

エコプラザ多摩（４年生)、バリアフリーを探ることを中心とした地域調べ（３年生）では、例えば、施設や設備を使う人が誰であるかを明確にしながら、利益が受けやすいかどうかなどを分析しました。コロナ禍で多くの学校が実現できなかったスーパーマーケット見学（３年生）では、普段調べることができない「バックヤード」にまで入れていただきました。３年生の追究意欲は一層高まりました。６年生の移動教室は子供たちの思い出に残ったであろう場面が多くありましたが、例えば、林業体験での間伐では、子供たちが伐採すべき樹木を選ばせてもらうなど、学習が一層深まる経験ができました。

「取り戻す」ことと「改善する」こととが少しずつですが形になってきた事例です。

「粘り強く」

先日、６年生が収穫したピーマンを校長室に届けてくれました。青々としてツヤのある果実を早速家で食べました。シンプルに、半分に切って種をとり、そのまま網焼きにしました。私は、子供の頃に大好物だったことを思い出しながら、収穫の素晴らしさと６年生の心配りに感謝をしました。

９月に行われる予定の「諏訪っ子市場」は昨年度からさらにバージョンアップをさせて取り組んでます。より多くの集客を行うためにはどうしたらよいかをゲストティーチャーから学んでいます。ホームページのブログには、様々な発信をしようとする工夫が見られています。また、販売する上での工夫について追求することを通して「経済の基礎」にも触れています。

販売当日には多くの収穫物が必要です。想像だにしない苦労を味わいながら、「粘り強く」取り組んでいます。

収穫と言えば、５年生も６年生と似た苦労を味わっています。田に、あるときには水を十分に張り、またあるときには乾かす、という難しい工夫に取り組んでいます。これは、「根をしっかりと張らす」ためです。米一粒にも様々な労力が込められていることを体験を通して深く認識する、そんな学習を目指しています。

厳しい暑さに対応をしながら

特に７月から厳しい暑さになりました。グラウンドで少しでも遊べるように、と登校後に朝遊びを設定しましたが、早朝からの高温でこれも叶わないことがありました。本校教職員の環境への挑戦はこれからも続いていくと思っています。その根底には、子供たちが何よりも安心して過ごせるように安全な環境を整える、という使命感があります。今後も皆様に御理解をいただくことにもなりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

もちろん子供たちにも、そして皆様にとりましても今夏が素敵な季節になることをお祈り申し上げております。そして、９月１日に元気に登校する子供たちを迎えたいと思います。

６年生との学びをさらに広げて
－ある座談会に参加して－

７月４日、６年生と昭和館に行きました。主に、第二次世界大戦中の我が国の様子を学びました。特に、語り部から聞いた「疎開体験」は、その厳しい生活ぶりに思わず胸が締め付けられました。同時に、子供たちが生きていく未来に何を残すべきか、と考えていました。

その際、私は壁に貼ってあったチラシを見付けました。「歴史探偵　半藤一利展」が７月１５日から開催されること、そして、そのオープニング・イベントとして座談会が行われる、と記されていました。薄学の私にはきっと難しいだろう、と思いながら、それでも一度聞いてみたい、と申し込みました。

申し遅れましたが、半藤一利さんは絵本「焼けあとのちかい」（大月書店、2020 年）をお書きになられた方です。半藤さんが 1945 年３月 10 日に経験された東京大空襲のお話です。私は、昨年の３月に全校朝会でこの絵本を読みました。

座談会で、きっと半藤さんが経験された第二次世界大戦を中心とした歴史のお話が聞けるのではないか、と期待をしたわけです。

「歴史を学ぶ」を学ぶ

しかし、よく考えれば、半藤さんは第二次世界大戦のみならず多くの御著書を執筆されているわけですから、私の思いはとても狭い範囲でしかありませんでした。逆に、広いものの見方も学ぶことができた、と振り返っています。

例えば、パネリストであった保坂正康さんは、半藤さんの歴史観を以下のように話されました。

・個別的経験に基づいている（実証主義）
・原因と結果を重視している
・自分の言葉で易しく説明する
・例えば、戦争であれば、被害を受けた人々の事実を大切にする

そして、保坂さんは「真理は些末なところにある」とまとめられました。一見重要ではないと思われるところに実は真理がある、ということなのでしょう。また、保坂さんは、半藤さんが歴史を調べる際に用いられる資料の限界を意識しながら、単に抽象に持ち込むのではなく、可視化、つまり具体的に表現をしていくことを重視されていた、ともおっしゃいました。

私は、ふと６年生の社会科・歴史学習を思い出していました。「貴族の世の中」「武士中心の時代」などとその時々の特色を学習の中で取り扱いますが、ともすると、その特色を明らかにしたいがために、調べてきた細かい知識や情報をまとめたがってしまう、と振り返りました。この細かい知識は、ともすると暗記をするものとして子供たちを苦しめるものでもある、と捉えていたのかもしれません。しかし、今回の座談会を聞いていると、暗記、覚えること、ということとは少し異なりますが、それこそ些末、とも思える中に本当の事実がある、だから、まとめに至る前の追究の意味や価値を改めて考える大切さを確認していくことが学びなのかもしれない、と今更ながらに思っていますがいかがでしょうか。

「空襲の中を逃げ回るよりは、ね」

さて、それでも私は、「焼けあとのちかい」に関することを何としてでも聞きたいと思い、耳をそばだてていました。やはり、パネリストの一人であられた戸高一成さんから、一つのエピソードを伺えました。

ある日、墨田川にかかる首都高速のほど近いお店で会が催されていたそうです。それまで、半藤さんはあまり東京大空襲のことをお話にならなかったようでもあります。「口にするのもおぞましい」。

会場の上を多くの車が走っていたそうです。「変な世の中になったね」、この言葉に続けて半藤さんは次のようにおっしゃったそうです。「でも、空襲の中を逃げ回るよりは、ね」。

８月 15 日の終戦記念日を中心に、80 年近く前の戦争が様々に伝えられることでしょう。私は、６年生と社会科見学を行ったことから一つの出会いをもらった、と思っています。子供たちは、今夏に歴史を学ぶきっかけをもてるのかもしれません。そのときに、戦禍に生き、犠牲を強いられた人々から学ぶ事実から平和について具体的に考えることもあるかもしれません。

実り多き夏になれば、と老婆心ながら思っています。

失礼をいたしました。

御報告

７月１８日付で、五十嵐久也が着任しました。特別支援教室「つばさ」での指導を中心に行ってまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

トイレ改修工事について

６月末にはトイレに不具合が生じました件では大変ご迷惑をおかけいたしました。

８月 11 日より末日まで工事を行い、９月からは全てのトイレが使用できるようになる予定です。御理解の程よろしくお願い申し上げます。